かきつばた

藤井　雅人

淫雨の下に　群れ集まった緑の剣が
逆さ立ち　おまえに告げる
――逸走する不住のこころの
ここが　辿りついた終端と

橋は折れ曲がり
透いた泥濘に足は行きなやむ
雫が身に細穴をうがつなか
胸うちの堰は黒い水の底にしずむ

緑の剣が　いっせいにそよぎ　反りかえる

（からころも　きつつなれにし　つましあれば）

宙にゆらぐ　青い炎たち
ひとつひとつの　花のつめたさが
おまえを迎えとるだろう
氷に熱した舞いの渦に
ひややかな錯視の檻に

（はるばるきぬる　たびをしぞおもふ）